

Title	書評：渡辺秀樹・金鉉哲・松田茂樹・竹ノ下弘久編著『勉強と居場所：学校と家族の日韓比較』勁草書房、2013年
Sub Title	
Author	金, 鎮淑(Kimu, Jinshuku)
Publisher	三田社会学会
Publication year	2014
Jtitle	三田社会学 (Mita journal of sociology). No.19 (2014. 7) ,p.133- 136
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評 目次のタイトル：「書評： 渡辺秀樹・金鉉哲・松田茂樹・竹ノ下弘久編著『勉強と居場所』」
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA11358103-20140705-0133

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

書評：渡辺秀樹・金鉉哲・松田茂樹・竹ノ下弘久編著

『勉強と居場所——学校と家族の日韓比較』勁草書房、2013年

金 鎮淑

本書は、慶応義塾大学と韓国の青少年政策研究院の研究者が2006年から2012年までの7年間に、「青少年社会化」をテーマに研究した成果をまとめたものである。両国の中学生と高校生を対象にして、成人移行期にある彼らを取り巻く学校や家庭における勉強や人間関係に注目した研究である。

韓国と比較した理由に関して、編集者の渡辺秀樹先生は、「社会・経済・文化（宗教）・教育環境あるいはそれらを支える歴史が大きく異なる欧州諸国と比較するのではなく、そうした条件が相対的に類似し、また交流機会の多い近隣諸国と比較することの意義を再確認する必要がある」というふうに言及する。日本で留学した経験がある評者もこれに賛同する。例えば、日本を欧米と比較して、「日本人は平等に敏感である」というのを日本人独特の社会意識であると述べる本を読んだときに、評者は違和感を感じるようになったことがある。その時、評者は「日本人よりもっと平等に敏感である韓国人と比較したら、それを日本人独特の意識だと言えるかな」と思った。もし、韓国における名門私学のある大学が付属の中学校や小学校を設置して、エスカレーター式の進学制度を実施しようとしたら、全国から猛烈な非難を浴びてしまい、深く謝罪をしてその決定を取り消すしかないし、もともとそのような不平等な制度は考えることさえできないはずなのである。

そのような疑問を抱いていた評者は、日本の学歴意識をテーマにインタビューした時に、「日本のエスカレーター式の進学制度は平等を重視する韓国人からみると、想像もできない不平等なものなのですが、どうして日本の方はそれを容認するんですか」という質問をしたこともある。その質問を受けた保護者たちは、それは以前からの制度であり、特に不平等であると考えたことはないという反応を見せたのである。

本書は韓国と日本の中学生と高校生を対象に、彼らの教育アスピレーション、ジェンダー意識、学校適応と成績のような学業の次元だけではなく、学校空間や友人関係、学校に対する生徒や親の期待、パーソナル・メディアの使用状況のような生活の次元も含めた研究書である。階層、家族形態とジェンダーを中心的な分析の軸と設定して、両国の教育制度と学校文化の分析結果を解釈する時のコンテクストとしているので、両国の差異に対して社会科学的な分析とともに現実味のある説明を述べている。調査方法としては質問調査のような統計的な分析方法とインタビュー調査を並行した。したがって、本書を通して、両国の青少年に対して実証的なデータとともに彼らのリアリティに迫る資料を基に、比較的な観点から総合的な理解を図ることが出来るのではないだろうか。本書の構成は以下のとおりである。

金鎮淑「書評：渡辺秀樹・金鉉哲・松田茂樹・竹ノ下弘久編著『勉強と居場所』」
『三田社会学』第19号（2014年7月）133-136頁

序 章 変容する青少年と青少年の社会化

第1章 青少年政策の日韓比較―教育から雇用への移行過程をめぐって

第2章 こどもの成績と親のサポート

第3章 家族ぐるみの学歴競争

第4章 青少年のジェンダー意識と教育アスピレーション

第5章 居場所を求める若者・受験競争する若者

第6章 日韓青少年の学校生活を支える要因

終 章 研究の総括と課題

第1章では、韓国と日本において成人期への移行期にある青少年たちを取り巻く教育や社会の競争構造のあり方の特徴やその背景を論じているので、両国の比較調査の結果を理解する足場を提供している。特に、1990年代以降の韓国における高校の多様化政策の進展により、新名門高校が登場して高校の間で序列化が形成されている変化とその波紋に対して的確的に説明している。

これは1974年から始まった高校の平準化政策に大きな地殻変動が起きたことである。韓国の平準化政策というのは、日本の学区制のようなことで、該当地域では公立だけではなく私立学校も対象にした画期的な政策であった。この政策の目的は、学校の間で序列化をなくして、教育的な選抜において決定的な時期を大学入試まで延期することである。すなわち、大学に入る前には個人間の差はあっても、学校の差はなくて、誰でも一生懸命に勉強すれば良い大学に入れる可能性と自信感の余地を制度的に保障したことである。そのため、子どもの進学意欲と親の教育期待を大学入試の時まで冷却させない効果があった。

しかし、韓国社会の二極化現象に従い、階層の間における子どもの進学意欲と親の教育期待にも階層間の差異が深化している中で、高校の多様化政策によって韓国の教育選抜制度は早期化しているといえるだろう。韓国では、高校の入試制度だけではなく、中学校の入試制度にも変化がみられる。いわば、国際中学校というエリート学校が登場して、中間階層以上の人々の間で人気が高まっている。したがって、韓国の中高等教育段階における基本的な選抜制度は依然として平準化政策を維持しているのに、その中身は崩れつつあるといえよう。したがって、韓国の教育選抜制度は転換期を迎えている。韓国と日本の教育と青少年を比較した先駆的な研究書がそのような変化を取り上げられず、平準化政策だけで韓国のことを記述したこととどまったことも、過渡期にある韓国の事情が反映されていないことである。本書の中でも、何カ所でもそのような変化が十分に議論されていない部分が目に付くのも、過渡期にある韓国のことを物語ることでありと見られる。

しかし、韓国の政府は未だに平等意識が強く、特に教育選抜における不平等は許せないという国民的な情緒を意識して、平準化政策を高校の入試制度の根幹として維持している。そのた

め、本書で指摘しているように、韓国では、出身階層に関わらず進学意欲が高く、また階層に関わらず親の教育期待が高いことは子どもの進学意欲を高めるように作用している。

それと同時に、本書は調査結果から次のようなことを明らかにしている。母親の学歴及び父親の職業的地位別に分析した結果、子どもに投じている教育費においては、日本よりも韓国の方が階層差が大きい。さらに、韓国では階層が高い方が母親と父親のソーシャル・サポート(子どもの勉強や成績について話しをする、子どもの心配事や悩みを聞く)、母子会話のいずれも多くなっている。これは、親の教育への関与の階層差は日本よりも韓国の方が大きいことを意味する。したがって、韓国における子どもの進学意欲や親の教育期待は階層を問わず加熱しているのにもかかわらず、実際に親の子どもの教育への関与においては階層の差が日本よりも大きく出ているのである。

ジェンダー意識に関しては、韓国の青少年が日本の青少年に比べ、保守的なジェンダー意識には反対し、革新的なジェンダー意識には賛成している傾向があると論じている。さらに、韓国において男子学生よりも女子学生の方が、革新的なジェンダー意識を持っている。男女ともに、大学以上の高等教育機関へ進学意欲をもっている学生が圧倒的多数を占めて、実際の進学率も男女ともに8割に近い韓国では、男子学生だけではなく、女子学生にとっても、教育アスピレーションは「男は仕事、女は家庭」のようなジェンダー意識から独立している。その反面、日本の女子学生は、ジェンダー意識によって、教育アスピレーションが異なり、革新的なジェンダー意識を持っているほど、高い進学希望をもっている。韓国は日本に比べ、男女の区分を強調する儒教的規範の強いという先行研究の結果と異なる本書の議論は、韓国の激しい変化を把握している。

教師の好きな理由という質問に対しては、日韓で共通して「授業が面白い」「親切に教えてくれる」「生徒をよく理解してくれる」が主な理由であり、教師が嫌いな理由に対しては、日本では「授業が面白くない」、韓国では「生徒を差別する／不公平である」が最も多い。一部のエリート学校以外では平準化されているので、各学校における学力の差が大きいのが韓国の実情である。さらに平等意識が強いので、成績によって生徒を差別する教師に対する不満が高くならざるを得ないのであるだろう。

親子の会話内容については、「勉強・成績への関心が高い韓国の親たち／友人関係に関心の高い日本の親たち」という相違がみられる。日本の場合、友達を選ぶ基準やその条件として「成績」と語中高生はまれである。その一方、韓国の中高生たちは非常にストレートに「成績」や「勉強」が重要だと語る。韓国において親子の関係だけではなく、友人関係においても学業が中心になるのは、本書の1章で述べたように、韓国が富士山型の社会であり、平準化制度を維持していることと関係があるだろう。

本書のタイトルである「勉強と居場所」というのは、編者が言ったように、韓国と日本の学校文化の差異を象徴的に表現したことである。日本の学校が「コンサマトリー」な空間として機能し、多面的な関わりが可能であるのに、韓国の学校は「インストゥルメンタル」な空間と

して機能していると指摘している。もちろん、学校のレベルや生徒の学力や階層によって、韓国の学校や生徒の中でも「コンサマトリー」の性格が強い場合があり、日本でも同じことをいえるだろう。すなわち、本書でも強調したように、韓国と日本の比較のために両国の異なる制度や文化を取り出しているのに、階層、ジェンダーや家族形態によってさらなる変奏曲が出るので、その三つの要因を分析の基本軸に設定している。

18年前に評者が日本に来たときに、睡眠時間も節約すべき高校生なのに、部活に没頭する日本の学校文化に大きなショックを受けたことを今も鮮明に覚えている。韓国と同じように学歴主義社会であり、受験競争が激しいことで世界的に有名な日本なのに、韓国では想像も出来ないことを目の前にしたことであった。それを振り替えてみると、韓国と日本における学校文化の差異というのは、歴然たるものであるといえるだろう。

しかし、8割に近い高等教育機関への進学率による学歴のインフレ現象や平準化政策の後退と高校間の序列構造の深化という韓国における早くて激しい変動を考えると、これから韓国ではいかなる変化が展開するだろうか。韓国の学校も「コンサマトリー」空間になり、親の教育熱も冷却し、生徒の生活も「勉強」から距離を置くようになるかもしれない。しかし、韓国が将来に今の日本のように変化するとしても、また、韓国と日本の間ではさまざまな差異があるはずなのではないだろうか。そのようなことが、韓国と日本の比較研究の面白さであるといえよう。

（キム ジンシュク 釜山大学学校教育発展研究所）